

コード No. 18285

**Anti-Rat
TNF- α Rabbit IgG Affinity Purify**

容量 : 100 μ g

はじめに : TNF (Tumor Necrosis Factor)と LT (Lymphotoxin)は、それぞれ腫瘍壊死因子、細胞障害因子として見出されました。両者は生理活性の多くを共有し、同一の受容体を介すること、アミノ酸の相同性から TNF ファミリーを形成し、TNF- α 、TNF- β とも呼ばれています。TNF- α は、157 個のアミノ酸からなる分子量約 17kDa のタンパク質で、76 アミノ酸のシグナルペプチドをもち、分泌される場合と、膜結合型となる場合があります。分子内にジスルフィド結合をもち、 β シート構造が重なったサンドイッチ状をし、ウイルス外被タンパク質にみられる jelly-roll 構造と類似します。共有結合なしに円形の三量体を形成して、生物活性を示しています。TNF- α は、マクロファージをはじめ、多くの細胞で、産生されるのに対し、LT の産生は、リンパ球系に限られています。TNF- α の持続性過剰産生、産生不良は、種々の疾患の原因や増悪をもたらします。リポタンパクリパーゼの阻害(カケクチン作用)により血中脂肪酸の提供を抑制し、細胞内脂肪分解から悪液質(カケクシア)を起こします。また、肥満細胞などの脱顆粒により大量の TNF- α が放出され、アレルギー反応を拡大しています。そのほか、敗血症ショック、移植、SLE、糖尿病、動脈硬化症など、多くの病態に関与が報告されています。

免疫抗原 : Rat TNF- α の C 端部分合成ペプチド

精製方法 : 抗原ペプチドによる特異精製

包装形態 : 1 % BSA、0.05 % NaN_3 含有 PBS 1.0 mL に溶解したものを凍結乾燥

再生方法 : 精製水 1.0 mL 添加(この時濃度は 100 μ g/mL となります)

保存方法及び : 2 ~ 8 $^{\circ}\text{C}$ 保存 5 年間安定

安定性 : 溶解後 -20 $^{\circ}\text{C}$ 保存 2 年間安定

使用目的及び : 免疫組織染色約 5 μ g/mL にて使用可能(凍結切片)

使用方法 : ウェスタン・ブロッティング 約 5 μ g/mL にて使用可能

コード No. 18285

**Anti-Rat
TNF- α Rabbit IgG Affinity Purify**

容量 : 10 μ g

はじめに : TNF (Tumor Necrosis Factor)と LT (Lymphotoxin)は、それぞれ腫瘍壊死因子、細胞障害因子として見出されました。両者は生理活性の多くを共有し、同一の受容体を介すること、アミノ酸の相同性から TNF ファミリーを形成し、TNF- α 、TNF- β とも呼ばれています。TNF- α は、157 個のアミノ酸からなる分子量約 17kDa のタンパク質で、76 アミノ酸のシグナルペプチドをもち、分泌される場合と、膜結合型となる場合があります。分子内にジスルフィド結合をもち、 β シート構造が重なったサンドイッチ状をし、ウイルス外被タンパク質にみられる jelly-roll 構造と類似します。共有結合なしに円形の三量体を形成して、生物活性を示しています。TNF- α は、マクロファージをはじめ、多くの細胞で、産生されるのに対し、LT の産生は、リンパ球系に限られています。TNF- α の持続性過剰産生、産生不良は、種々の疾患の原因や増悪をもたらします。リポタンパクリパーゼの阻害(カケクチン作用)により血中脂肪酸の提供を抑制し、細胞内脂肪分解から悪液質(カケクシア)を起こします。また、肥満細胞などの脱顆粒により大量の TNF- α が放出され、アレルギー反応を拡大しています。そのほか、敗血症ショック、移植、SLE、糖尿病、動脈硬化症など、多くの病態に関与が報告されています。

免疫抗原 : Rat TNF- α の C 端部分合成ペプチド

精製方法 : 抗原ペプチドによる特異精製

包装形態 : 1 % BSA、0.05 % NaN₃ 含有 PBS 0.1 mL に溶解したものを凍結乾燥

再生方法 : 精製水 0.1 mL 添加(この時濃度は 100 μ g/mL となります)

保存方法及び : 2 ~ 8 °C 保存 5 年間安定

安定性 : 溶解後 -20 °C 保存 2 年間安定

使用目的及び : 免疫組織染色約 5 μ g/mL にて使用可能(凍結切片)

使用方法 : ウェスタン・ブロッティング 約 5 μ g/mL にて使用可能